

韓國人の日本語學習者における形容詞 アクセントの實態調査*

李 香 蘭**

目 次

1. はじめに
 2. 研究対象と研究方法
 - 2.1 インフォーマント / 2.2 調査の手順
 3. 調査結果及び要因分析
 - 3.1 形容詞アクセントの規則 / 3.2 活用形別アクセントの内訳
 - 3.2.1 終止形アクセント / 3.2.2 連体形アクセント / 3.2.3 ～ク活用形アクセント
 - 3.2.4 ～クテ活用形アクセント / 3.2.5 ～ケレバ活用形アクセント /
 - 3.2.6 ～カッタ活用形アクセント
 4. おわりに
-

1. はじめに

拙稿(2004)「東京語における形容詞アクセントの変化」では、形容詞アクセントが若い人を中心に終止形と基本型(單獨で讀んだ場合)で使われた場合は、逆平板化、すなわち起伏型への変化が目立っていた。例えば、「このくつアカイね①」が「このくつアカイね②」に中大型へ変化したことである。もう一つの結果としては起伏型形容詞の活用形(～ク、～ケレバなど)において、例えば「サムク(寒く)なる①」が「サムクなる②」など、アクセント核が1 拍後ろにずれる現象などがあげられる。このような形容詞アクセントの変化は、東京出身者に限る現象なのかそれとも全国的現象であるかを明らかにするため、拙稿(2005)ではインフォーマントを東京出身者以外の人を選定して調査した結果は項目ごとに少しの差は見られるものの、変化の平均値はかえって地方出身に高く現われた。このような傾向は、アナウンサーの発音やテキストのテープの発音においてはまだ起こらず、どこまでも一般の自然な會話の中で現われる現象ではないかと考えられる。

今回は、このように日本語の形容詞に標準語アクセントの原則があるにも関わらず、東京出身にさえ変化が起こりつつあるが、果たして韓國の日本語學習者は日本語の形容詞アクセント

* 이 논문은 2004년도 원광대학교 교내연구비 지원에 의해 연구되었음.

** 원광대학교 부교수 (日本語音聲教育・音韻論 專攻)

をどのように知覚しているのか、また日本語のレベルによってアクセントの意識も変わるのか、その実態を調査して前回(拙稿2004・2005)の結果と比較しながら検討してみたい。

2. 研究対象と研究方法

2.1 インフォーマント

韓国人の日本語学習者における形容詞アクセントの実態を調査するにあたって、インフォーマントは現在圓光大學日本語教育學科に在學している學生¹⁾で、日本語の能力によって二つのグループに分けた。その一つのグループは1年以上日本経験があり、それに日本語能力試験1級を取った学習者(以下、上級者という)であり、もう一つは日本経験なしで、2級レベルに当たる学習者(以下、中級者という)のグループである。最初は70名を調査したが、このようなインフォーマントの条件に当てはまらない人を除いて、上級・中級レベル15名ずつ計30名を最終的に本稿の対象者とした。

2.2 調査の手順

調査の項目や手順は前回と同一な方法を採用した。すなわち、平板型の「赤い、おいしい²⁾」2語と起伏型の「寒い、青い、大きい」3語を各々活用形6つを対応させた30例を持ち、自然な會話体の文を作り、出来るだけ日常生活の中で使われているアクセントで發話してもらうように試みた。更にデータの正確性や個人の中に2つ以上のアクセント型がある場合もあるので、これらの文を5回ずつ反復して作った150個の文をランダム形式にして、發聲するようにした。5回分の發音の中で3回以上同じアクセントが出た場合、有効なアクセントとして扱うことにした³⁾。次に調査の項目の例をあげる。

-
- 1) 全員、主成長地は全羅道で、現在も全羅道に住んでいる學生である。
 - 2) 「赤い」は『新明解國語辭典』『NHK日本語發音アクセント辭典』『明解アクセント辭典』『全國アクセント辭典』とも平板型となっていて、「おいしい」は『NHK(新版)』と『全國アクセント辭典』には平板型⁰⁾と起伏型⁻²⁾が両方記載されているが、いずれも平板型が優勢な型となっている。
 - 3) 個人のアクセントの中でゆれのある場合、最大2つのアクセントは見られたが、それ以上は現れなかったので、5回の發音の中で4回は同じアクセント型が得られた。ゆれのある場合にもそのアクセントは表記したが、多數型アクセントだけ有効なものとして扱うことにした。

<調査項目>

アカイ (赤い) 0

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1) このりんごすごく <u>赤い</u> ね | 2) これ <u>赤い</u> くつじゃない? |
| 3) ちょっと <u>赤</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>赤</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>赤</u> ければいいのに... | 6) ちょっと前まで <u>赤</u> かったのに... |

オイシー (おいしい) 0

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1) このりんごすごく <u>おいしい</u> ね | 2) これ <u>おいしい</u> りんごじゃない? |
| 3) ちょっと <u>おい</u> しくなりましたね | 4) このりんご <u>おい</u> しくてやめれませんね |
| 5) もうちょっと <u>おい</u> しければいいのに... | 6) ちょっと前まで <u>おい</u> しかったのに... |

サムイ (寒い) -2

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1) ここはすごく <u>寒い</u> ね | 2) ここは <u>寒い</u> ところじゃない? |
| 3) ちょっと <u>寒</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>寒</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>寒</u> ければいいのに... | 6) ちょっと前まで <u>寒</u> かったのに... |

アオイ (青い) -2

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1) このりんごすごく <u>青い</u> ね | 2) これ <u>青い</u> りんごじゃない? |
| 3) ちょっと <u>青</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>青</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>青</u> ければいいのに... | 6) ちょっと前まで <u>青</u> かったのに... |

オーキー (大きい) -2

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1) このりんご <u>大きい</u> ね | 2) これ <u>大きい</u> りんごじゃない? |
| 3) ちょっと <u>大</u> きくなりましたね | 4) このセーター <u>大</u> きくて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>大</u> きければいいのに... | 6) ちょっと前まで <u>大</u> きかったのに... |

3. 調査結果及び要因分析

3.1 形容詞アクセントの規則

基本形は動詞と同様に平板型(0型)でなければ起伏型(-2型⁴⁾)であるが、0形容詞は「赤い、

4) 後ろから2拍目にアクセント核がある型である。ここでは起伏型の場合、後ろから数える方法をとることにする。

厚い、遅い、おいしい」など約10%⁵⁾しかなく残りは「寒い、青い、辛い、寂しい」など-2型（以下-2にする）である。形容詞は各々の活用形によって次の例のようにアクセントが変わる⁶⁾。

（濃く示されたところはアクセント核のある拍である。）

平板型（赤い）	アカイ	アカイクツ	アカクナル	アカクテ	アカケレバ
	アカカッタ	アカカロウ	アカイカ	アカイデス	アカサ
起伏型（寒い）	サムイ	サムイトコロ	サムクナル	サムクテ	
	サムケレバ	サムカッタ	サムカロウ	サムイカ	
	サムイデス	サムサ			

平板型の形容詞は「赤い」の例に、起伏型の形容詞は「寒い」の例と同一なアクセントとなるが、「酸っぱい、小さい、大きい、多い⁷⁾、深い、低い⁸⁾」などは音韻構造上、別なアクセントになっている。例えば「大きい」は「オーキナヘヤ、オーキクナル、オーキクテ、オーキケレバ、オーキカッタ、オーキカロウ、オーキイカ、オーキイデス、オオキサ」などのようになっている。

3.2 活用形別アクセントの内訳

アクセントの規則のところで見えてきたように、形容詞はその活用形によってアクセントが変わる。そこで、前回と同様にここでも「終止形・連体形・～ク・～クテ・～ケレバ・～カッタ」など6つの活用形と中・上級レベルに分けて調査を行ない、正解率や日本語の能力とアクセントとの関わりなどを検討してみる。それから、これらの結果を持ち、前回発表したものと比較しながら述べることにする。

まず、基本型として単獨で讀んだ場合は拙稿(2004・2005)では終止形と全く同一な結果が得られたので、單獨の場合は終止形と同様にみている。馬瀬・佐藤(1985)『東京語アクセント資料』では、例えば基本形の「赤い」の場合は0が14/19名、-2が5/19名、「おいしい」は0が10/19名、-2が9/19名であらわれ、前回調査した基本型・終止形とのデータとは大きな差が出ている。これは『東京語アクセント資料』が約20年前の資料であるため、起伏型の動きが現在より鈍かったことを示すものではないかと思われる。

5) 田代晃二(1988)『美しい日本語の發音』創元社、p.40参照。ここでは形容詞300語の内、平板型の割合が1割(10%)になると書いている。

6) 田代晃二(1988)とNHK編『日本語發音アクセント辭典』付録pp.202-207参照。

7) 多い(オーイ)は音韻構造上、基本形が-3と-2が併存している。

8) 深い(フカイ)、低い(ヒクイ)などの-2形容詞はアクセント核が置かれる拍が無聲化した母音であるため、-3が「フカク(-2)、ヒクク(-2)」のようにずれる。「～ク、～クテ、～ケレバ、～カッタ」などの活用形においても同様である。

3.2.1 終止形アクセント

[表1] 終止形アクセントの内訳

標準語アクセント		アカイ (0)*	オイシー (0)	サムイ (-2)	アオイ (-2)	オーキー (-2)
計	地方 (12名)	0(1) -2(10) -3(1)	-2(12)	-2(11) -3(1)	-2(12)	-2(11) -4(1)
	東京 (14名)	0(1) -2(13)	0(2) -2(12)	-2(14)	-2(14)	-2(14)
	上級 (15名)	0(3) -2(12)	0(5) -2(7) H-3(3)	-2(13) 0(1) H-2(1)	-2(14) 0(1)	-2(10) 0(4) H-3(1)
	中級 (15名)	0(1) -2(14)	0(1) -2(9) H-2(3) H-3(2)	-2(7) H-2(8)	-2(12) 0(1) H-2(2)	-2(7) 0(1) H-2(6) H-3(1)

※Hは東京アクセントの原則からはずれる1拍目と2拍目を高高(HH)で発音していることである。

まず、「このりんごすごく赤いね」の例文のように終止形として使われた場合には[表]のように、平板型(0)の「赤い、おいしい」は日本人と同様に起伏型(-2)に発音している学習者が目立つ。これは日本人の場合、大きな変化が起ったのは、形容詞は平板型の所屬語数は少なく、起伏型が圧倒的に多いということがその変化の要因となったのではないかと推測される。つまり、多数形アクセントへの統合(勢力の移り変わり)によることであろう。秋永(2002)でも多数形アクセントへは品詞によって偏りがあり、動詞・形容詞は現在平板型から中大型へ移るものが多いと指摘している。ところが、このような現象は連体形のところにも取り上げているが、形容詞全体的な傾向ではなく、特に終止形と基本形で目立つ現象として注目すべきことである。

ところが、学習者の場合、このような理由も考えられるが、韓国人の-2への発音の傾向(拙稿1999)が説得力を持つだろう。-2の傾向はHHで発音している人を含めると上級者73.3%、中級者93.3%(地方91.7%、東京89.3%)に及ぶ。このため、平板型の終止形の標準語への正解率は、いずれも非常に低かったが、上級者26.7%、東京の人10.7%、中級者6.7%という順にかえて韓国の上級の学習者のほうが高く調査された。

起伏型の「寒い、青い、大きい」は全体的に正解率がかなり高く見られたが、中級の学習者のみ低い正解率(57.8%)を見せている。これは「1拍目と2拍目のアクセントは必ず高低(HL)または低高(LH)の位置関係にある」という東京アクセントの原則にまだ馴れていない点で、1拍目と2拍目または3拍目まで同じ高さで発音しているものが多いからである。このような発音は日本人の場合、一回も見られなかったが、上級者5回、中級者は22回も現われている。

3.2.2 連体形アクセント

[表2] 連体形アクセントの内訳

標準語アクセント		アカイ (0)	オイシー (0)	サムイ (-2)	アオイ (-2)	オーキー (-2)
計	地方 (12名)	0(10) ⁹⁾ -2(1) -3(1)	0(7) -2(5)	-2(11) -3(1)	-2(12)	-2(11) -4(1)
	東京 (14名)	0(14)	0(6) -2(8)	-2(14)	-2(14)	-2(14)
	上級 (15名)	0(13) -2(2)	0(14) -2(1)	-2(2) 0(12) H-2(1)	-2(2) 0(13)	-2(5) 0(9) H-2(1)
	中級 (15名)	0(11) -2(4)	0(7) -2(8)	-2(3) 0(4) H-2(8)	-2(5) 0(10)	-2(2) H-2 (3) 0(8) H-3 (2)

日本人の場合、連体形は終止形と語形は同じでも正解率がかなり高く、まだ安定している状態にある¹⁰⁾と言えよう。特に、起伏型の正解率は平均97.2%で調査されたが、韓国の学習者においては、起伏型の連体形は上級・中級とも平板型で発音している傾向(上級者75%、中級者48.9%)が高く、正解率は平均21.1しか見られなかった。このうえ、中級者は起伏型を東京アクセントの原則からはずれるHHHまたはHHHで発音している回数(13回)が多く現われ、日本人の発音とは対照をなしている。

[表1]と[表2]で分かるように、平板型の連体形が比較的安定しているのに対して、終止形は起伏型に多く変わる要因は、前で指摘された「多数形アクセントへの統合」の他、もう一つ考えられるのは、文の最後が平板型で終わる場合は、まだ文が終わっていないということが感じられ、途中で下がり目を置きたいという心理的な要因がはたらいた可能性も排除できないだろう。

それから「おいしい」は3拍語である「赤い」とはその結果に若干の差をみせ、連体形の「おいしい」の方にも起伏型が進んでいると言えよう。こうした現象は多拍語になると、平らに高く発音するには途中で下がり目を置きたいという発音の容易さへの欲求によるものと考えられる。

9) ()の中の数字は各々のアクセントで発音された人数である。ここでは地方出身12名の内、0(平板型で発音された数)が10名、-2型、-3型で発音された人は各々1名となっている。

10) これは、平板型形容詞か後ろに来る平板型名詞を修飾する場合、「あかいくつ(低高高高)」のように後続される名詞の語頭の拍は一般的に高く発音されるからであろう。

3.2.3 ～ク活用形アクセント

[表3] ～ク活用形アクセントの内訳

標準語アクセント		アカク (0)	オイシク (0)	サムク (-3)	アオク (-3)	オーキク (-4)
計	地方	0(8) -2(4)	0(7) -2(5)	-3(6) -2(6)	-3(5) -2(7)	-4(6) -2(6)
	東京	0(7) -2(7)	0(6) -2(8)	-3(7) -2(7)	-3(7) -2(6) 0(1)	-4(4) -2(10)
	上級	0(9) -2(2) -3(4)	0(6) -2(9)	-3(11) -2 (1) 0(3)	-3(6) -2(3) 0(6)	-4(4) -2(5) 0(6)
	中級	0(4) -2(9) H-2(1) -3 (1)	0(1) -2(11) H-3(3)	-3(2) -2(7) H-2(5) 0 (1)	-3(1) -2(9) H-2(1) 0 (4)	-4(1) -2(7) H-3(4) H-2 (1) 0(2)

まず、[表3]の全体的な傾向は、アクセントの規則からはずれた型で発音した人が多いという点である。それから変化のパターンは、-2への変化が目立っている。つまり「ク」の直前拍にアクセントが置かれる傾向が強いということである。この傾向は東京出身に54.3%、地方出身に46.7%が見られ、-2への変化は全国的な現象であると言えよう。このような現象は、上級者26.7%、中級者57.3%が調査され、日本語のレベルによって大きな差を見せているが、特に中級者にとっては有利な方向へ進んでいると言えよう。

正解率においては東京出身44.7%、上級者48.4%が現われ、かえって韓国の学習者のほうが若干上回っていることが分かる。ところが、中級者は12.8%しか現われず、学習者の間では正解率に大きな差が出てきている。それから上級者の発音ではHHで始まる例は見られないのに対して中級者では15回も発音していて、さらに対象語5語ともアクセントのばらつきが大きい。

3.2.4 ～クテ活用形アクセント

[表4] ～クテ活用形アクセントの内訳

標準語アクセント		アカクテ (-3)	オイシクテ (-3)	サムクテ (-4)	アオクテ (-4)	オーキクテ (-5)
計	地方	-3(11) -4(1)	-3(9) -5(2) -1(1)	-4(5) -3(7)	-4(4) -3(8)	-5(8) -3(4)
	東京	-3(14)	-3(14)	-4(6) -3(8)	-4(5) -3(9)	-5(2) -3(12)
	上級	-3(14) -4(1)	-3(15)	-4(3) -3(10) H-3(2)	-4(1) -3(14)	-5(9) -3(6)
	中級	-3(9) H-3 (3) -2(2) -4(1)	-3(8) H-3 (3) H-4(3) -5 (1)	-4(0) -3(6) H-3(9)	-4(0) -3(14) -2(1)	-5(2) -3(9) H-3(1) H-4(3)

「赤い、おいしい」など、平板型形容詞に「～クテ」がつく場合は原則上、「ク」の直前拍にアクセントがくる。これは前に言及したように「ク」の直前拍にアクセントを置く傾向が強いということと関わりがあるのか、正解率は東京出身100%、地方出身83.3%、上級者96.7%でかなり安定している。しかし、中級者は低い正解率(50.7%)を見せ、さらにHHで発音していて、日本語の能力とアクセントの正解率には比例関係が成り立つと言えるだろう。

ところが、起伏型の場合、地方47.2%、東京31%、上級28.9%、中級4.4%の順に日本人、学習者とも低い正解率を見せている。これはやはり「ク」の直前拍にアクセントが置かれる傾向が高いという点と関わりがあるだろう。さらに中級者はHHIまたはHHIIで発音する例(23回)が多く、また「オーキクテ」は3名が長母音(引く音)にアクセントを置く形をとるなど、発音のばらつきが大きい。

それから「大きくて」は東京と地方出身の間、上級者と中級者の間にも大きな差を見せている。まず、東京出身は規則を守った人はわずか2名しかなく残り12名は「キ」が無聲化¹¹⁾する拍であるにも関わらず、そこにアクセントを置く形を取っているが、地方の人と上級者は、規則を守る例がはげれる例を上回る。このように、ばらつきが大きいのは「オーキクテ」は「長母音」や「母音の無聲化」など音韻構造上、アクセントを置きにくい拍が續いているため、アクセントが安定していないからであろう。

11) 無聲化した母音が来る場合には原則上アクセント核は1拍前にずれるが、こうした拍が續く場合はその拍にアクセントが置かれるか、さらに1拍前にずれるときもある。例によっては、拍後ろにずれるときもある。

3.2.5 ～ケレバ活用形アクセント

[表5] ～ケレバ活用形アクセントの内譯

標準語アクセント	アカケレバ (-4)	オイシケレバ (-4)	サムケレバ (-5)	アオケレバ (-5)	オーケレバ (-6)	
計	地方	-4(11) -5(1)	-4(8) -6(4)	-5(5) -4(7)	-5(5) -4(7)	-6(12)
	東京	-4(14)	-4(8) -6(6)	-5(6) -4(8)	-5(6) -4(8)	-6(14)
	上級	-4(12) -3(3)	-4(3) -3(10) H-5(2)	-5(3) -4(9) -3(3)	-5(1) -4(9) -3(5)	-6(3) -3(11) -4(1)
	中級	-4(5) -3(6) H-4(4)	-4(3) -3(8) H-5(2) H-4(1) -5(1)	-5(1) -4(4) -3(2) H-4(6) H-3(2)	-5(0) -4(7) -3(5) H-4(3)	-6(1) -3(9) H-3(2) H-4(3)

日本人、学習者とも「寒ければ、青ければ」では「～ク・～クテ」と同様にアクセント核が「～ケレバ」の直前拍に来る傾向が高い。その内譯は中級者66.7%(HHで始まるものを含めた割合)、上級者60%、地方58.3%、東京57.1%という順になっている。

そして「大きければ」は前の「大きく、大きくて」とは結果が異なり、ゆれが見られるものの、アクセントが非常に安定していて、地方・東京とも全員新しい型はあられず、原則通り発音しているが、学習者の場合「オーケレバ」の「ケ」にアクセントを置く割合(73.3%)が非常に高い。

さらに、目立つ現象としては、上級者・中級者とも発音のばらつきが大きいということである。これは拍数が長くなることによってアクセント型も多くなっていると思われる。特に「おいしければ、寒ければ」は「赤ければ」と差があり、上級者は3つのアクセントのパターン、中級者は5つのパターンを見せている。そこで正解率にも影響を与え、日本人の場合、平均70.2%が現われているのに對して学習者は平均24.2%しか見られない。これは「アカケレバ」と「オイシケレバ」音韻構造が異なり、「オイシケレバ」では前にも述べたようにアクセントを置きにくい二重母音や無聲化した母音が来たため、アクセントが安定せず、多くのパターンに分かれていると思われる。

それから「～ケレバ」活用形において注目したいのは、日本人には-3で発音した人が1名もいなかったが、学習者は-3、つまり「～ケレバ」の「ケ」にアクセントが置かれる傾向(上級者42.7%、中級者45.3%)があるということである。

3.2.6 ～カッタ活用形アクセント

[表6] ～カッタ活用形アクセントの内訳

標準語アクセント		アカッタ (-4)	オイシカッタ (-4)	サムカッタ (-5)	アオカッタ (-5)	オーキカッタ (-6)
計	地方	-4(12)	-4(9) -6(3)	-5(5) -4(7)	-5(6) -4(6)	-6(11) -4(1)
	東京	-4(14)	-4(11) -6(3)	-5(6) -4(8)	-5(5) -4(9)	-6(14)
	上級	-4(13) -3(2)	-4(6) -3(9)	-5(4) -4(10) H-4(1)	-5(1) -4(11) -3(3)	-6(4) -4(4) -3(7)
	中級	-4(10) -3(3) H-4(2)	-4(2) -3(8) H-4(4) H-5(1)	-5(1) -4(6) H-4(8)	-5(0) -4(8) -3(4) H-4(3)	-6(2) -4(1) -3(7) H-3(1) H-4(2) H-5(2)

「～ケレバ」と「～カッタ」のアクセントは規則としては同一であって、平板型形容詞は「ければ」「かった」の前の拍に、起伏型形容詞は前の前の拍にアクセントが置かれる。ところが、正解率は平板型と起伏型の割合は東京89.3%:59.5%、地方87.5%:61.1%、上級者63.3%:20%、中級者40%:6.7%と現われ、平板型が起伏型を大きく上回っている。

このうち、特に学習者の起伏型の正解率が低い理由は「～ケレバ」と同様に「～カッタ」の「カ」にアクセントを置く傾向(上級者28%、中級者30.7%)があるからである。また多拍語や音韻構造上アクセントを置きにくい拍が續くため、ばらつきが大きいこともその理由の一つになるだろう。

「オーキカッタ」は日本人の場合、1名のみ原則からはずれたアクセントをしているが、中級者は拍数と同じ6つのパターンも現われ、非常に不安定なアクセントをしていることが分かる。それから中級者は標準語のアクセントでは決して現われないHHHまたはHHHHで始まる例が23回(上級者は1回)もある。こうした中級者の発音は、活用形の全例からみれば、118例も見られた。

4. おわりに

本稿は韓国人の日本語学習者を中心に日本語のレベルを分けて形容詞アクセントを活用形別に調査を行ない、前回の結果と比較しながら検討してみた。その結果をまとめてみると、次のようである。

第1は、終止形では日本人、学習者とも平板型「赤い、おいしい」の起伏型への変化が目立ち、連体形においては学習者は、起伏型も平板型で発音している傾向(上級者75%、中級者48.9%)が高く、日本人の結果とは対照をなしている。

第2は、起伏型形容詞の「～ク・～クテ・～ケレバ・～カッタ」活用形においては、これらの活用形の直前拍にアクセントが置かれる傾向(東京57.3%・地方56.3%・上級58.3%・中級80%)が高く現われた。

第3は、「～ケレバ・～カッタ」では、日本人には-3で発音した人が1名もいなかったが、学習者は-3、つまり「～ケレバ」の「ケ」と「～カッタ」の「カ」にアクセントを置く傾向(平均36.7%)がある。

第4は、標準語のアクセントでは決して現われないHHIまたはIHHIで始まる例が、日本人には1例もなく、上級者も12例のみ見られたが、中級者では118例も現われた。

第5は、正解率からも分かるように日本語のレベルが低ければ低いほど、標準語のアクセントからはずれる例が多く、アクセントのばらつきも大きいと言えよう。そこで日本語の能力が低い学習者には特に平板型の練習を身につける必要があると思われる。

第6は、正解率は当然日本人のほうが高く現われているが、終止形において平板型の起伏型への変化や「～ク・～クテ」でのアクセント核が1拍後ろにずれる現象などは、韓国の学習者にとっては、かえって有利に働くだらう。こういう現象が将来、日本で定着してくるかどうかは今のところ判断しにくい。

ともあれ、今回の発表の問題点と課題は調査の対象語をもう少し増やしてデータの正確性を図るべきで、今後、こうしたことも含めて、日本人にさえ形容詞アクセントに大変化が起こりつつある中で、韓国の日本語学習者に形容詞アクセントをどのような方向で指導すべきかなどは、日本語のアクセント教育上、重要な課題として残される。

【参考文献】

- ・ 李香蘭(1996)「平板化する日本語のアクセント」『日本文化學報2』韓国日本文化學會, pp.51-69
- (1999)「한국인 일본어 학습자의 일본어 악센트 학습 효과」『日本文化學報第7輯』韓国日本文化學會, pp.101-121
- (2004)「東京語における形容詞のアクセントの変化」『日本語文學第23輯』韓国日本語文學會, pp.109-125
- (2005)「日本語における形容詞アクセントの実態調査-地方出身者の発音を中心に-」『日本文化學報第24輯』韓国日本文化學會, pp.75-90
- ・ 秋永一枝(2002)「東京語の発音とゆれ」『現代日本語講座第3巻発音』明治書院, pp.40-58

- ・佐藤亮一・馬瀬良雄(1985)『東京語アクセント資料』科研費資料集,pp.1-1028(形容詞)
- ・佐藤亮一(1990)「現代東京語のアクセント一年齢差および辞典との差を中心に」『國語論究 2』
明治書院, pp.204-239
- ・田代晃二(1988)『美しい日本語の発音』創元社, pp.40-64
- ・陣内正敬(1997)「平板化アクセントの意味するもの」『月刊日本語3号』アルク, p.32-33
- ・最上勝也(1984)「変りつつある共通語のアクセント(1) デンシャ(電車)からデンシャへアクセントの
平板化現象」『NHK放送研究と調査』 pp.48-55
- ・NHK編(1999)『日本語発音辞典』NHK出版, 付録 pp.202-207

K C I

要 旨

日本語の形容詞に標準語アクセントの原則があるにも関わらず、東京出身にさえ変化が起こりつつあるが、果たして韓国の日本語学習者は形容詞アクセントをどのように知覚しているのか、また日本語のレベルによってアクセントの意識も変わるのか、その實態を形容詞の活用形別に調査を行ない、拙稿(2004・2005)の結果と比較しながら検討してみた。その結果をまとめてみると、次のようである。

第1は、終止形では日本人、学習者とも平板型「赤い、おいしい」の起伏型への変化が目立ち、連体形においては学習者は、起伏型も平板型で発音している傾向が高く、日本人の結果とは対照をなしている。

第2は、起伏型形容詞の「～ク・～クテ・～ケレバ・～カッタ」活用形においては、これらの活用形の直前拍にアクセントが置かれる傾向が高く現われた。

第3は、「～ケレバ・～カッタ」では、日本人には-3で発音した人が1名もいなかったが、学習者は-3、つまり「～ケレバ」の「ケ」と「～カッタ」の「カ」にアクセントを置く傾向がある。

第4は、標準語のアクセントでは決して現われないHHまたはHHHで始まる例が、日本人には例もなく、上級者も12例のみ見られたが、中級者では18例も現われた。

第5は、正解率からも分かるように日本語のレベルが低ければ低いほど、標準語のアクセントからはずれる例が多く、アクセントのばらつきも大きいと言えよう。そこで日本語の能力が低い学習者には特に平板型の練習を身につける必要があると思われる。

第6は、正解率は當然日本人のほうが高く現われているが、終止形において平板型の起伏型への変化や「～ク・～クテ」でのアクセント核が1拍後ろにずれる現象などは、韓国の学習者にとっては、かえって有利に働くだろう。こういう現象が将来、日本で定着してくるかどうかは今のところ判断しにくい。

キーワード：逆平板化、多数形アクセント、アクセントのばらつき、HH または HHH 現象、
活用形の直前拍、日本語のレベル

투 고 : 2005. 11. 30
1차 심사 : 2005. 12. 10
2차 심사 : 2005. 12. 31